2023（令和５）年度

外部評価報告書

2023（令和 5）年 12 月

熊本学園大学
KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY

目　次

1.　外部評価の実施概要

2.　外部評価委員名簿

3.　外部評価委員による評価結果

4.　意見交換会時の主な意見等

5.　総括

1. 外部評価の実施概要

【1】「外部評価シート」の作成

外部評価委員へ「令和 5 年度熊本学園大学外部評価シート」及び関係資料を送付し、「2022（令和 4）年度　自己点検・評価報告書」等に基づき、以下の 4 項目について評価をいただいた。

［1］　基準 4　教育課程・学習成果

［2］　基準 5　学生の受け入れ

［3］　基準 9　社会連携・社会貢献

［4］　その他（大学全般について）

［1］、［2］、［3］については、4 段階（**4** 大変適切である、**3** 概ね適切である、**2** やや適切ではない、**1** 適切ではない）にて評点を付していただくとともに、全 4 項目について意見を聴取した。

【2】　意見交換会の実施

Ⅰ　日　　時：令和 5 年 9 月 29 日（金）　16:00～17:45

Ⅱ　場　　所：熊本学園大学　本館 3 階　特別会議室

Ⅲ　＜会次第＞

1. 開会
2. 学長挨拶
3. 外部評価委員の紹介
4. 大学関係者の紹介
5. 意見交換

評価項目 1：「基準 4 教育課程・学習成果」について

評価項目 2：「基準 5 学生の受け入れ」について

評価項目 3：「基準 9 社会連携・社会貢献」について

その他　：評価項目以外の自己点検・評価項目及び大学業務全般に関する意見交換

6. 閉会

学長挨拶

＜司会進行＞得重学長室長

＜外部評価委員出席者＞足立國功委員、小金丸健委員、洲上敬介委員

＜本学側出席者＞細江学長、金副学長、立木副学長、得重学長室長、西村事務局長

＜陪席＞教務部長、事務局次長、総務部長、入試広報部次長、
学術文化部事務次長、教務課長、総務課長、総務課長補佐

【外部評価委員による評価までの経緯】

8 月上旬：外部有識者への評価の依頼（外部評価委員の委嘱依頼）

8 月 29 日（火）：委嘱状の送付

9 月 7 日（木）：外部評価に関する資料(2022(令和 4)年度自己点検・評価報告書、令和 5 年度熊本学園大学外部評価シート等、意見交換会のご案内）の送付

9 月 25 日（月）：「令和 5 年度熊本学園大学外部評価シート」の提出締切

9 月 29 日（金）：外部評価に関する意見交換会の実施

2. 外部評価委員名簿

令和 5 年 9 月 29 日現在

（順不同・敬称略）

氏　名	役職等
足立　國功	熊本ソフトウェア株式会社　取締役会長
江頭　実	菊池市長
小金丸　健	熊本県理事（デジタル戦略担当）
洲上　敬介	肥後銀行執行役員　北熊本ブロック統括店長
松永　健身	熊本県立熊本北高等学校　校長

3. 外部評価委員による評価結果

〔1〕基準４　教育課程・学習成果について

評点 （平均）	3.2/4.0

＜評価に関する意見等＞

- カリキュラムに関して、アンケートを適宜行っている点は評価できる。その結果を自己点検や改善向上に向けているとのことであるが、大学院の授業科目の開講率の低さや、登録者不足による閉講などの状況を勘案すると、アンケート結果が施策見直し等に具体的につながっているかなどの疑問が残る。
- 商学部における産学連携における取組は、学生の学習能力の向上と就職観に良い影響を与え評価できる。また、企業側にとっても大学と学生の問題解決能力が把握でき、安定的な人材確保にプラスに作用するのではないか。
- 商学部のＰＢＬ強化の取り組み、英米学科のビジネス副専攻、社会福祉学部のフィールドワークや現場実習などの取り組みは非常に評価できる。
- 創造力を涵養するための「STEAM 教育」にかかる授業科目を考えられてはどうか。特に“A”でのリベラルアーツについては、これからの時代には必須ではないか。
- 新たな価値づくりとなる「デザイン思考」、新たなビジネスソリューションを創出する手法「バックキャスト」などを盛り込むことはどうか。
- コーポレートガバナンスについてですが、大学の「建学の精神」を踏まえたそれぞれの学部・学科の特色を生かした「アジャイル型組織」として、責任と明確な役割によりスピーディーな PDCA サイクルによって、時代のニーズに迅速に対応した全体の PDCA とするやり方はどうか。
- カリキュラム選定については、地元企業による講師派遣を積極的に取組み、またゼミや授業の一環として地域商店街の活性化を考察するなど、経営を体験できる授業を拡大する必要がある。

〔2〕基準５　学生の受け入れについて

評点 （平均）	2.8/4.0

＜評価に関する意見等＞

- 特に文理融合の「経済データ分析専攻」、「地域・国際経済専攻」など、他大学にはないTSMCが進出した熊本県ならではの学科等は、県内外の高校生、教員、保護者にとっても極めて魅力的なものであると考えており今後の展開等に大変期待している。
- 80 年も続く大学経営の中で、「学生の受け入れ」が最も重要かつ戦略性が求められるもので、これまで社会環境に沿った進化が行われてきたことは評価される。しかしながら、昨今の劇的な社会環境の変化や人間教育の変化に伴い、もっと高いレベルで魅力ある大学に進化する必要がある。具体的には、大学の魅力向上と大学の募集体制の確立は分けて検討する必要があると認識している。大学の魅力は、学生に選ばれる傾向をしっかり充足させ、全国的な傾向と地方の傾向を取り入れ、学生志望思考にヒットするものが必要と考える。大学募集体制は、募集人員の確保がミニマムのミッションであるが、学力低下や望まない学生受け入れに繋がらない戦略が必要である。また優秀でたまたま他の大学に不合格だった学生を受け入れる戦略も必要である。
- 高校の教育現場にも、徐々に課題解決型学習（アクティブラーニング）が定着しつつあり、課題研究を実施する高校も多くなってきている。そのような環境下で学習した高校生たちは、大学入学後 PBL を志向し、大学卒業後は自らの考えで起業したり、課題解決型の仕事ができる職業に就くことを希求したりすることになると思われる。そのあたりを考慮していただき、カリキュラムの編成や貴学の特色を打ち出していただけると、高校の関係者としては生徒たちにより貴学を薦められると思う。
- しょうがいのある方の入学に際して、入学前に入学後の合理的配慮等の支援内容等の説明、入学後のニーズに応じた環境・支援内容についての改善に努めていることは評価できる。
- 夜間部である第二部社会福祉学科については、大幅に定員割れをしており、大学基準協会より改善課題とされたが、地域社会との係わりにおいてカリキュラムのスリム化や社会人のリカレント教育課程の整備など慎重に検討されている。
- 大学院入学者と定員とについては、充足されていない現状であるが、学内外の学生を対象とした個別相談の実施、そして商学・経済研究科の設置に努めている。

・ 厳しさを増す大学間の生存競争の中で、よりニーズに合った魅力的な講義内容の充実が重要と思われる。
・ 入試についても関係者によるアジャイル型組織を形成して素早い PDCA サイクルによって、より的確に入試のありようを分析・検討できるのではないか。
・ 現在熊本は台湾の TSMC の工場建設により魅力ある地域、半導体産業の牽引地域に変化しようとしている。その大きな経済的な波に大学も乗れるように努力しないといけないと思考する。

〔3〕基準９　社会連携・社会貢献について

評点 (平均)	3.2/4.0

＜評価に関する意見等＞

・ 多様な包括連携協定により、学外組織との積極的な活動がみられ、様々なコミュニケーション手段により、多くの機会をとらえた情報発信がされている。
・ 社会人向けに、図書館の一般利用者への開放や金曜日夜、土、日曜日の受講による単位習得のウイークエンドコース、市民公開の研究会・講座さらには社会福祉関連の現場の方々への研究会を開催している。
・ 取り組みのコア組織としての「地域連携センター運営委員会」にて自治体や地域社会との連携事業、講座開講や新規事業への対応等について協議し活動に反映しており、必要に応じて「内部質保証推進委員会」に連動している。
・ 国際交流基金、熊本市国際交流振興事業団、JICA、コムスタカ等と連携し、海外研修、演習実習科目、課外活動を行い、教育研修活動を推進している。海外交流も積極的に行われている。子銅商店街でのイベント協力や水俣市を学ぶフィールドワークを実施する等地域貢献活動も評価される。また子ども達との関わりも多く実施されている。
・ 社会連携と社会貢献については、熊本地震の際、独自の避難所開設により多くの市民を助けるなど大きな活動は報告されている。また社会との連携や貢献には、自画自賛になってはならず、多くの地域の人とあれ合い、そして結果として貢献活動に繋がることが必要である。教育機関として何が貢献活動になるのかがポイントであり、ボランティアと実益な成果は分けて考える必要がある。

・ 現状社会が求めていることは、SDGs と DX 化であり、SDGs の観点から持続可能性のある連携とその成果が伝わりやすいものと考える。さらにカーボンニュートラルの視点から地方自治体や企業と連携し、文系ならではの発想も喜ばれるところと推察する。
・ 国際交流団体との連携や留学生等への支援活動などは、TSMC 熊本進出に伴う受け入れ環境づくり、多文化共生社会の実現につながる有効な取り組みである。

〔4〕その他（大学全般について）

・ 生成AIの急速な普及により様々な分野でこれまでのビジネスや業務等の生産性向上などとして利活用されてきている。その中で最も影響される分野のひとつが教育であるといわれてきていることから、大学としてもどのような対応をしていくべきかの方針などを明らかにする時期ではないかと思われる。
・ コロナ禍によって加速されてきている今日、「建学の精神」に流れている“人間力”の涵養こそ DP・CP・AP の前提として、ますます重要性を増してきているように思う。
・ このような変化の時代であるという意識・認識をもって、教育にあたる組織全体が学習し続ける文化というべきものを、いわゆる組織文化の醸成が大事ではないか。
・ 貴学の学生さんの御活躍について、さらに多くの情報が周知されると貴学の人気はさらに高まるものと思われる。例えば、PBL の一環として、地域の商工農業の活性化に取り組む研究が実を結んで、学園大の学生さんがニュースや新聞の報道で大きく取り上げられたり、スマホのソフト開発等で学生さんが社会に貢献し、有名になったりするなど、研究に励む貴学の学生さんがもっと脚光を浴びるようになれば、高校生もあこがれをもって貴学を志望するようになると思う。

4. 意見交換会時の主な意見等

【基準 4】

- 時代の趨勢に対応するには、情報リテラシーではなく、デジタルリテラシーであり、その意識を持つ必要があるのではないか。
  - ➢ ご指摘の DP（ディプロマポリシー）の見直しを検討いたします。
- 各種アンケート結果の可視化や改善報告がなされているものの改善施策が学生まで共有されていないのではと感じた。
  - ➢ 授業評価アンケートについては、アンケートに基づいた授業改善の提示を学生に行っています。
- アンケート調査は、例えば、回答ルールの明確化を行い、時間軸の同一性を考慮するなど、アンケート調査の理論に基づき行われるべきである。
  - ➢ 各種アンケートに対して、内容や実施方法について検討いたします。

【基準 5】

- 社会人学生の受講が容易となるように、デジタルを活用したオンライン教育の可能性を検討していただけたらと考える。
  - ➢ 現在、オンライン教育の可能性について検討中です。

【基準 9】

- 多くの社会連携や社会貢献活動を行っているが、横断的なつながりがあると活動をメニュー化でき、さらに効果的に活動できるのではないか。
  - ➢ 問題意識を持ち、改善に向けた取り組みを行っています。
- 学生の活動等について、さらに情報発信をしていくべきではないか。
  - ➢ Web サイトや SNS、広報誌等で情報発信を行っていますが、さらに充実を図ります。

【その他】

- 卒業生が多分野で活躍をしている。就職先を前面に出す広報等が必要ではないかと思う。
  - ➢ こちらについても、さらに広報の充実を図ります。
- 生成 AI への対応について、学内のみではなく学外へも情報発信し、大学のプレゼンスアップにつながるのではないか。
  - ➢ 生成 AI の進展を踏まえながら、本学の対応や情報発信について検討いたします。

5. 総括

本学では、毎年度、本学における教育研究活動と管理運営等の状況について、部局毎に、部局自身による点検と評価を行なっており、その結果を自己点検・評価報告書としてまとめている。内部質保証推進委員会は、その報告書に基づき結果を検証して改善に結びつけ、本学の教育研究活動と管理運営等の質を継続的に向上させる必要がある。その推進には、自己点検・評価の信頼性と妥当性と高めることが必要不可欠であり、そのために学外の有識者による評価をいただいている。今年度は 5 名の委員に、自己点検・評価報告書の「基準 4　教育課程・学習成果」「基準 5　学生の受け入れ」「基準 9　社会連携・社会貢献」について評価をいただき、その評価に関する貴重なご意見を多数いただいた。内部質保証推進委員会より、自己点検・評価報告書と外部評価結果に基づき各部局に対して改善指示を行っており、改善指示後に提出される改善報告書の検証においても、外部評価でいただいたご意見を参考にさせていただく所存である。また、それらに限らず教育研究活動と管理運営等で、いただいたご意見を念頭に質の向上を目指したい。最後に、本学の内部質保証にご協力いただいた外部評価委員の皆様に謝意を表する。

2023（令和 5）年度　外部評価報告書

2023（令和 5）年 12 月

熊本学園大学内部質保証推進委員会